

## ケガレと臓器移植

杉田 暉 道

日本における臓器移植問題は一九六八年のいわゆる「和田移植事件」をきっかけとして起こったが、「脳死」判定の基準問題とからめて論じられるようになってから、複雑な様相を呈するにいたった。

現在の臓器移植は外国では交通事故などによる脳死者の出現を待つて行なわれているが、アメリカでは医療保険に加入していない低所得の若者が、脳死後の臓器提供を条件に、代償としての高額な終末医療を受ける場合が少なからずあるという。

臓器提供が必要をはるかに下まわる今日の現状では、とくにわが国においては死生観、遺体観が他の国と極めて異なるので臓器移植は十分に国民のコンセンサスを得た後に実施すべきであると考えられる。

そこで先ず臓器移植の問題点はどこにあるかを検討すると、波平によれば

(1) 遺族が家族や血縁者の遺体を臓器移植のために傷つたくないという意志を強く持っている。この根底には遺族は亡くなった人の確認がその霊魂だけでなく、身体そのものにあると考えているからである。(2) 全く見知らぬ人、誰かから

ない不特定の人の命を救うことについて、積極的な価値を見出せない人が存在する。(3) 日本人の多くの人は今もなお、死者の価値は生存者の価値に勝るとも劣らないと強く考えている。そのあらわれとして日本でもそれほど信仰がないと思われる人でも亡くなった肉親の年忌供養を行って死者と共に自己をも尊んで欲しいと願う行為を行うのである。

新村によれば、(1) わが国に伝えられた中国の伝統的な医学観が存在する。この考えにたつと臓器移植は、臓器を提供する人の人格をも自分の体の中にとりいれることになるから、自己の人格の完結性の喪失を意味する。(2) 遺体を傷つけることをタブー視する感情が存在する。(3) 上記の遺体観はケガレの観念に包まれている。と述べている。今回は上記の問題点の中のケガレについて検討を行ったので、その結果を報告する。

現代日本においてケガレがどのように考えられ、どのように扱われているかをみると、大貫はケガレの実態は日常の衛生習慣を検討することによって把握できる。とし、日常の衛生習慣を①日常の衛生習慣と空間分類、②日常の衛生習慣と時間区分、③日常の衛生習慣と身体、に分けケガレとの関係を検討している。その結果①については自分の家の外や下(履き物や足、床、地面などで代表される)はばいきんや人のちりで汚染された場所、ケガレた場所ということになる。②については例えば、女性は生理期間中の入浴および洗髪は慎しまねばならない(不浄すなわちケガレていると考える)。③について

は例えば日本人はお金は汚いものであると考える。身体の中で手は汚れるが洗えばきれいになると考えられ、下半身は本質的に汚いところとされているので、洗っても完全にきれいにならないとするのである。以上を要約すると、日本の衛生習慣は、内・外<sup>1</sup>・上・下<sup>2</sup>清潔・不潔<sup>3</sup>浄・不浄(ケガレ)を表わしているといえる。

古代からの浄・不浄(ケガレ)の観念についての移り変わりをみると、『古事記』に伊弉諾尊が亡くなった伊弉冉尊のうじのわいた死体を見たためにケガレた身になるが、清めの儀式を行うことにより日本の主要神が生まれたとある。天照大神は伊弉諾尊が左の目を洗ったときに、須佐之男命は伊弉諾尊が鼻を洗ったときに生まれたという。これから考えられる『古事記』の世界は次の三つの対立軸の形でくり広げられている。すなわち浄・不浄(ケガレ) Ⅱ 生・死<sup>4</sup>上・下である。『祝詞』では神の怒りを誘う行為を罪とし、これをなくすために祓や禊が行われた。これが儀礼化して天皇が主宰する祭式となつたのは律令体制になつてからである。

一方新しい思想を持った仏教が五三八年に日本に伝えられ、鎮護国家を唱えた貴族仏教が平安朝に入ると、その教えは一般庶民にわかり易いように説かれるようになり、さらに殺生戒を中心とした仏教の戒律思想が急速に広まった。平安朝の後半期になると、戦争や疫病の蔓延がさらにはげしくなり、一般庶民の不安が一層広がった。仏教は現世は穢土であり、往生して浄土へ行くためには戒を守らねばならぬと力説

した。また朝廷は「天下触穢」の布告を出し、このケガレを消すために種々のタブーを出した。かくして浄・穢の観念が民衆の間に定着していった。

さいごに現代日本の衛生観念、治療力の観念と古代日本の浄・不浄(ケガレ)の観念との類似性についてみると、(1)古代日本の不浄(ケガレ)観は、うじのわいた身体、死体または膿のわいている病人に触れることに関連しており、この事実は現代日本においてもそのままではまるものである。(2)古代において祓い清めの役割を担つた自然の諸力は、現代においても引き続き同様の力があると考えられている。(3)浄・不浄(ケガレ)の対立は観念的のみならず道徳的側面をもあわせ持っていることは、古代と現代とはよく類似している。すなわち、浄・不浄(ケガレ) Ⅱ 生・死<sup>4</sup>上・下の観念では現代は古代と同じように文化の中に浸透しているといえる。

(平成六年二月例会)

### 横浜・太田陣屋の研究

中西 淳 朗

横浜の太田陣屋は、安政六年九月(開港三ヵ月後)に陸上警備の福井藩士を収容するために、大岡川をへだて太田新田の向い側の地(今日ノ京急日ノ出町駅周辺)に開設された。

しかし、現在の横浜には史料が残つて居らず、福井県立図